

## 書 評

---

Klaus Kremer: Die neuplatonische Seinsphilosophie  
und ihre Wirkung auf Thomas von Aquin.

Leiden, E.J. Brill, 1966, XXVIII, 508 S.

東 光 寛 英

本書は、B. Lakebrink の参画協同で、J. Hirschberger の編集による „Studien zur Problemgeschichte der antiken und mittelalterlichen Philosophie” の叢書の第一巻として刊行されたものである。その場合、本書は著者がドイツ研究団体の助成の交付を受けて出版したもので、フランクフルト大学の哲学部の推薦による大学教師資格論文で、J. W. Goethe 大学により受理されたものである。

著者が本書そのものの序文や後記の回顧文で示すように、本書の目的は、トマス存在概念と形而上学概念を明らかにすることにある。その場合、著者は、本書の叢書の序文に示される課題と目的・企図にしたがって、伝来されたる形式の単なる再生を避け、トマスを中心とし、スコラ哲学者、中世哲学及び Platōn, Plōtinos, Proklos, Dionysios の古代・中世哲学者と近代・現代哲学者との対話に入り、思想史、概念史、問題史によって、トマスの哲学概念とその思想の解明と分析をなし、哲学的な本質・事実問題に接近することを目的・企図としている。

本書で考察される主要素材は、*ipsum esse*, *ipsum esse per se subsistens*, *causalitas*, *Urbild-Abbild*, *unum et multa*, *Gott ist „alles” und „nichts”*, *creatio* (*emanatio*), *participatio* (*compositio*), *ens vel bonum per essentiam et ens vel bonum per participationem*, Die Triade „Sein-Leben-Denken”, *Exodus*, 3. 14 (*Exodusmetaphysik*), *actus essendi*, *id quod est—quo est*, *quid est—quid non est* などである。これらをめぐっての諸点が、本書の結論で、まず、問題提起として示され、上述の諸点が本論で展開され、その簡単な結論的

な解明が後記の回顧文で手際よくまとめられている。

本論は四つの部分から成り、多数のテキストとその分析を手掛け、第一部では、Plōtinos の哲学体系を詳細に取り扱い、本書の全頁の半分近くの数頁が割かれている。第二部では、Plōtinos で獲得されたものを背景として Proklos の思想が展開され、第三部では、Plōtinos と Proklos において得た成果を顧慮しながら、Pseudo-Dionysios, Areopagita の哲学体系が示される。以上の各部では、トマスをはじめとして、スコラ哲学者、中世哲学者、近代・現代哲学者との対話がなされている。第四部が、トマスの存在哲学で、本書の問題の諸点が分析総括され、トマスの存在概念の描出に努力するとともに、原文に即して、アリストテレス—トマス哲学の用語の分析解明と訂正が行なわれるが、それがネオ・プラトニズムとの関係で示されてくる。

著者は、トマスの存在哲学の思想的な系譜について、本質的には、Plōtinos から、Porphyrios, Proklos, Dionysios に導かれ、ネオ・プラトニズムの線に依存するとしているが、もっとも、著者は、トマスに対する Augustinus, Boetius, アラビア—ユダヤ哲学の関係にも触れ、トマスへの Aristotelēs の深い影響のことも考慮はしている。しかし、著者は、G. Verbeke の「トマスは、彼が自己意識したほどには Aristoteliker ではなかった」との見解を示している (S.351)。この第四部で論ずるところは、ネオ・プラトニズムへの影響のみである。トマスの存在把握の内部でのネオ・プラトニズムの影響のはたらきが示される。その場合、トマスのもろもろのテキストを比較対照している。なお、Plōtinos, Proklos, Dionysios についての解釈も、もろもろの注釈と文献を使用している。さらに、プラトンとプラトン学派に関するトマスのテキストについて、著者が、本書の脚注で、「これらの思想についての論述は、プラトニズムとネオ・プラトニズムに、事実的に、正当ではない」(S.352, Anm.5) が、本書の主題に意味があるとしている。とにかく、本書したがって第四部の目的は、トマスが学び知ったネオ・プラトンの存在論を把握し、トマスの思想体系内のネオ・プラトンの存在論の立場、位置を示そうとすることにある。

この書評は、最新刊としては時機を逸した感がし、多少躊躇したもの、トマスのネオ・プラトンの解釈として、著者の師 J. Hirschberger, C. Fabro などの

二三の例外を除いては、数少いトマスのネオ・プラトニズムの解釈だけに、あらためて本書を注目したかった。紙数の関係上、この書評は、トマスとネオ・プラトニズムとの関係を中心としながら、先述の注目すべきと思われる問題の諸点の中、二三の問題を取り上げ、第四部に焦点を当てて述べることにする。

まず、*ipsum esse* の „Sein” のみの一端についてである。著者によれば、トマスは、*esse* と *entia*, *Idee* と *Ideat* についての説明で、*Aristotelēs* の四原因に意識的に訴えることによって、プラトニズムを曲げ、その方向から逸脱して、プラトニズムからの転向をなしている。その意味では、トマスでは、*Anti-Platonismus* が呈示され、*Platoniker* と *Neuplatoniker* での多くの „Form” (形相) は拒否されている。しかし、唯一つだけは別である。それは、*das Sein* の形相、乃至、*ipsum esse* の形相である。ネオ・プラトニズムから転用された *ipsum esse* は、ネオ・プラトニズムに対しては、トマスでは、同時に、*das Gute* であり、*das Eine* であり、神であると説明される (S. 118)。しかし、*Plōtinos* では、*νοῦς* が *ipsum esse* (*αὐτοεἶναι*) であり、その原理は *τὸ εἶν* である。さらに、*ipsum esse* は形相の形相である。このようにして本書の第一部の *Plōtinos* では、*τὸ εἶν* と *τὸ ὄν* との存在面から、*νοῦς*, *ψυχή*, *φύσις* に関係づけながら、*パルメニデース* に依拠を求め、„*νοῦς*” と „*ὄν*” との同一性の問題を中心テーマの一つとして、*Plōtinos* の哲学が展開され、*τὸ εἶν*、延いては、神の *πανταχοῦ καὶ οὐδαμοῦ* の問題、トマスの場合には、神はなんらかの意味ですべての存在するもの (*alles Seiende*)、すべての事物を、*causaliter* あるいは *virtualiter* に含有し、その意味では、神はそれらと同一とされ、神はどこにでもあるが、それらいかなるものもそれら自身、神を分有しないから、神は同時にどこにもないと示される。*τὸ εἶν* においてはまず *das Sein* の充溢、延いては、*ipsum esse per se subsistens* が前置されねばならぬが、*Plōtinos* ではそこまでは進行しなかった。結局、*Plōtinos* の *τὸ εἶν* と *τὸ ὄν* について、著者は、*Plōtinos* が *das Sein* の原理で完全性の源泉と呼んだものは、*das Sein* の充溢、すなわち、*ipsum esse per se subsistens* であることにもなると示している (S. 109)。これらのことは、いわば、著者の *Plōtinos* への発展的解釈というべきものであろう。しかし、著者自身が、*Plōtinos* のすべてのテキストに対して、*τὸ εἶν* を *ipsum esse* として示そうとす

れば解決しがたい難点をとどめることになることは注意している (S. 192)。

Proklos では、 $\tau\acute{o}$   $\alpha\upsilon\tau\acute{o}\nu$  は、 $\delta\upsilon\kappa\alpha\theta'\ \upsilon\pi\alpha\rho\acute{\alpha}\xi\epsilon\upsilon$  延いては、 $\kappa\alpha\tau'\ \omicron\upsilon\sigma\iota\alpha\upsilon$ —(ens per essentiam)—であり、同時に、全存在領域の頂点であり、„seiend”ではなくて、das Sein selbst,  $\alpha\upsilon\tau\acute{o}$   $\delta$   $\xi\sigma\tau\iota$  であり、das Sein の充溢である。これは、また、 $\alpha\upsilon\tau\acute{o}$   $\tau\acute{o}$   $\epsilon\iota\delta\omicron\varsigma$ , Idee der Ideen である。これを、スコラ哲学では、primum ens, あるいは、maxime ens の下に、ipsum esse subsistens と解することになる。

Dionysios は、 $\delta\upsilon\tau\alpha$  と  $\alpha\upsilon\tau\acute{o}$   $\kappa\alpha\theta'\ \alpha\upsilon\tau\acute{o}$   $\tau\acute{o}$   $\epsilon\iota\upsilon\alpha\iota$  (das Sein selbst) と区別し、その区別は Proklos や Plōtinos よりも一層するとい。トマスは、Dionysios の解釈に当っては、 $\alpha\upsilon\tau\acute{o}$   $\delta\epsilon$   $\tau\acute{o}$   $\epsilon\iota\upsilon\alpha\iota$  を ipsum esse commune として、„commune” を附加している (S.300)。

トマスは、Plōtinos, Proklos, Dionysios の ipsum esse をもち、それを esse (ens) commune と解釈し、神から生み出され、神から進行せる最初のもの、ipsum esse creatum である。トマスでは、この esse commune の外に、ipsum esse subsistens としての神自身がある。このようにして、トマスでは、ipsum esse たる esse commune と神たる ipsum esse subsistens を一つにおく。しかし、トマスの „S. C. G., I, 26” などでは、ipsum esse commune は概念 (ratio) の ens として説明されている。すると、それは、知性においてのみ存在することになって、神の完全性にふさわしくなる。一体、esse commune には二義がある。一つには、それが純粋に論理的におかれる場合で、それは das Allgemeine で単なる概念、思考物となる。他は、ネオ・プラトニズムの下での理解で、その esse は、 $\tau\acute{o}$   $\xi\upsilon$ , あるいは、神にしたがってのすべての Wesen の das Realste と解する場合である。著者によれば、この二義の背後には、Platōn 的陣営と Aristotelēs 的陣営がある。著者は、これについてのさまざまな論議の末、esse commune は Platōn 的な眼で見れば、単なる概念の ens ではなくて、eine ontische Form であり、Platōn 的に把握する das Allgemeine であり、real な Form としての das Allgemeine であるとする。就中、神の場合、この esse commune には、すべての Realität の充溢と Inbegriff とがあるとのネオ・プラトニズムの見解をともにしていると説明する。すなわち、直接には、ネオ・プラトニズムの esse

commune とトマスの ipsum esse subsistens との内容的な一致であると著者は示す (S. 372)。

創造説 (creatio) では、ネオ・プラトニズムの流出説 (emanatio) との関係が論ぜられている。ipsum esse の自己分出化 (Selbstaufdifferenzierung) は、結局、流出説に入りこみ、トマスは、これを創造概念の解釈としてとりあげる。すなわち、„Non est motus nec mutatio, sed quaedam simplex emanatio”, である。創造の概念では、一方は、Aristotelés 的な causa efficiens で、facere, agere, producere が creare の性格で、他方は、Platōn の分有説とネオ・プラトンの流出説で、それら二つには、形相因を含むと述べ、著者が、本書の脚注で、Scheffczyk の見解としては、結局、トマスの創造説はアリストテレス的な原理の決定的な充当によって評価される創造説に達したと示し、さらに、Scheffczyk の見解の奇異の点を指摘しながら (S. 423, Anm. 65), 本文では、次のように説明する。Platōn の分有説とネオ・プラトニズムの流出説のトマスへの影響は人が認める以上に強く、prima causa efficiens としての神論は、Platōn の哲学のために解釈し直されるとともに、神の創造活動は、むしろ、プラトン——ネオ・プラトニズム的 causa formalis をもってのほどには、causa efficiens をもって解釈されないと示している (S. 423 ; cf. S. 471)。ただし、著者は創造説と流出説との普通に見られる対立・離接関係の和解を示そうと努力している (S. 421ff.)。

著者は、C. Fabroの意見にしたがって、トマスの創造説の主論は分有 (participatio) であると云う。トマスは、Dionysios の注釈では、アリストテレス的な概念を使用し、そこでは、分有の participatum—participans と actus—potentia の合成 (compositio) とが相い覆うている (S. 317)。分有と合成における基礎づけ、同一化とそれらの部分的な交叉の問題が、それぞれのテキストに即して論ぜられて、トマスでは、分有と合成とは一致するが、常にそうではない (S. 432)。著者によれば、分有の思考には „Haben” は属するが、合成の思考には本来的なものではない。分有の思考と合成の思考が並進している場合でも、それは真正の分有の概念を乱すものではないと示されている (S. 437)。

スコラ哲学やネオ・スコラ哲学で激論された actus essendi は、ネオ・プラト

ニズムにはない。しかし、著者は、*ipsum esse* をめぐって、*actus essendi* に対する C. Fabro 及び E. Gilson の *Exodusmetaphysik* による解釈とそれに対する批判が論ぜられ、それがトマスのテキストに即して示される (S. 441ff. ; cf. 38f.)。結局、*ens per essentiam*, あるいは、*ipsum esse* は、Gilson が示す *l'exister même* などや、*das Urbild der Existenz* ではなくて、*das Urbild aller Formen* を意味するとし、*ipsum esse* から事物に賦与される *das Sein* は *Da-seinsakt* ではなくて、*ein Seiende* の *die konkrete und aktuelle Natur* をつくり出す „*alle das*” である (S. 472f.)。しかして、著者が示す「Gilson の呈示は不幸である」(S. 443) のことばも、その批判の中に見え、著者と Gilson との対立の一面が窺われる。

本書の中で、Descartes, Spinoza, Leibniz, Schelling, Hegel, Kant, Heidegger などの近代・現代哲学者との対話も行なわれているが、 „*Sein*” の面では、Heidegger との関係が、多と一との統一などの面では、Hegel 的な表示が目立っている。その一例として、トマスの神の *sapientia* について、Hegel の „*aufheben*” の三義で解釈し、 „*negieren*” の点では、 „*Deus non est sapiens*”, „*aufbewahren*” の点では、 „*Deus est sapiens*”, „*erheben*” の点では、 „*Deus supersapiens est*” とし、それに対応し、スコラ哲学の *via negationis, affirmatio-nis, eminentiae* を示している (S. 69)。

著者によれば、トマスのアリストテレス解釈とネオ・プラトニズム解釈とは通分されないが、トマスの思惟の特色であると示されている (S. 470)。通分されないとしても、十二分に両者の解釈を関係づけた整合的・組織体系的にして分析的な研究成果は希まれないものであろうか。

本書で、*ipsum esse* を *das Urbild der Formen* とするとき、 „S. Th., I, 13, 11, c.” の „*Exodus*” の „*qui est*” に対する第一理由は、いかに著者は解釈するのであろうか。また、本書中で引用された „I Sent., VIII, I, I” の „*qui est*” についての第四の理由の Avicenna の解釈 (S. 393f.) についても、どのように解釈するのであろうか。著者は、それらの点については、立ち入って触れてはいない (cf. S. 390ff. ; S. 394, Anm. 163 ; S. 472)。

トマスは、神の存在証明で、アンセルムスの神の存在証明を „*propter quid*”,

トマス自身のそれは „quia” と示し (S. Th., I, 2, 2, c.), トマスの神論は an est から quid est <quid non est> の方向をとっていることを願慮するとき、著者が先述したように、因果論をめぐる ipsum esse <ipsum esse per se subsistens> の神を、causa efficiens ではなくて、causa formalis とすることは、トマスの神の存在証明の中、第四証明は正しく妥当するが、それを除いた他のものもろの証明はどのように解釈するのであろうか。もっとも、著者は、神の本体論的な存在証明を、概念から実在へと推論すると解することは不適中で誤解であるとし、その理由は、ネオ・プラトニズム的に解釈して、概念は Realität に対立せず、真の概念は同時にその „Sache” を示すとしている (S. 387)。

創造説における流出説との関係で、意志、自由意志の問題があるが、その点、„Wollen” は Plōtinos にも、Proklos にもあると論ぜられているもの (S. 56, S. 182, S. 323, S. 472)、トマスの創造説における自由意志の一層の高揚と強調、及び、神の人格的性格はギリシアの思想家に勝れる点と示されている (S. 422)。ただし、著者が、「トマスは、創造が流出を意味する場合、ネオ・プラトニズム学派の流出もまた創造と表示されうる」と云い、その括弧付けで、トマスにおける自由意志性の強調と神のみの創造活動の点は第二義的な意味に属する、と示している (S. 471)。このことは、ネオ・プラトニズムにとってではなくて、トマスの場合、どのように理解すべきであらうか。なぜならば、著者自身が、歴史的な誤りの一つとして、トマスを哲学的な方向で確立しようとすることを指摘しているし (ibid.)、したがって、創造を、キリスト教的な立場から把握すれば、当然、神の意志を考慮に入れなければならないからである。これらの点、トマスに引き当てて見れば、まず、本文の「創造」と「流出」の問題は、著者が両者の説を和解しようとする努力の表現であらう。次に、括弧付けの「神の意志」と「神のみの創造活動」については、次のように思われる。本書では、結局、著者が、トマスへのネオ・プラトニズムの解釈に力点をおくところにその原因があるのであろう。そもそも、Plōtinos の思想を、„emanatio” <流出> の概念で特徴づけることには、H. Dörrie が示すように、問題のあるところではあるが、著者は、それを emanatio の概念で把握し、創造の概念の解釈に、emanatio の助けを借り、しかも、先述のように、両者の対立の和解に努力している。その場合、

causa が神に対する関係が問題で、causa efficiens として、神が把握されれば、創造の自由意志及びその活動が問題となるが、causa formalis として、神が把握されれば、神の bonitas が問題となる。本書では、トマス存在哲学の根源を、直接、聖書の „Exodus, 3.14” に求めずして、ネオ・プラトニズム、したがって、Plōtinos に求め、この場合、ネオ・プラトニズムによるトマス解釈として、causa formalis としての神が強調されたためであろうか。

Victor Preller: *Divine Science and the Science of God. Reformulation of Thomas Aquinas*, Princeton University Press, 1967, ix+281.

稲垣良典

コプルストンがかつて、従来どちらかといえば大陸哲学の影響を蒙ることの多かったトマス哲学の研究者たちが、英国および米国で優勢な経験主義哲学や分析哲学にもっと注意をはらったならば、トマス哲学にとって有益な結果が生ずるであろうとのべた。コプルストンが考えていた有益な結果とは、トマス哲学研究が厳密さや明晰さを特徴とするものとなること、トマスの形而上学の根底にあるものについてより明晰な見解に到達すること、などであった。ここで紹介する研究はトマスの著作に見られる宗教的言語について認識論的分析を行なったものであるが、トマス研究をコプルストンが期待していた方向へとおし進めたものというであろう。

本書の主題は scientia divina、つまり哲学的神学もしくは自然神学と、scientia Dei、つまり啓示神学（トマスの用語にしたがえば聖教 sacra doctrina）との区別、およびその各々はいかなる意味で神にかかわるのか、という問題である。副題に「トマス・アクィナスの改訂」とあるのは、トマスが「神に関する自然的言語（自然神学）の情況 (status)、ならびにそれが啓示的言語（聖教）にたいして有する関係」について考えたところを、かれの神学的意図を尊重しつつ、こん